

## 「本妙院耐震改修」



呉 東航

神様と縁があるか、私はいくつもの社寺建築の耐震診断と耐震改修を手掛けてきた。その一件は都内にあり、かつこれがまともな補強が成し遂げた。

建物は大田区池上、有名な本門寺の麓にある「本妙院」というお寺である。昭和3年に建てられた本堂は、2010年耐震改修、免震化を行い、「国土交通省 住宅・建築物耐震改修モデル事業」に採択され、私の事務所は耐震診断と上屋の補強設計を担当した。

社寺建築の耐震診断には、さまざまな不確定要素が多くて難しい。宗教、地方、時代、作り手によって建物の様式も、材料も、工法も千差万別である。当然明確な診断方法もあり得ず、建築防災協会などから提示があるが、元々現代工学に基づいて建てられたものではないので、その性能を一つの指標に表すのは容易ではない。数字よりも、弱点を見据え、構造の常識と経験による判断が必要だ。

私はいくつもの地震調査で、社寺建築の被害をじかに見ていた。壁のない建物なので、全て柱頼りになるが、一体性が悪く、地震の時に柱の動きがばらばらとなり、一本が折れたら全体の崩壊に繋がる。また、接合部が弱く、繰り返しの揺れによって緩んだり外されたりして安定性を失う。「崩れ落ちる」よりも、「散り落ちる」と言った方が相応しい。

補強に壁を設けたり、柱を増やしたりするわけにはいかないので、私は建物を一体的にすることに重点をおいた。今回はまず、天井裏にある、元々部材が簡単に重なっている仕口部を、強いバンドで縛っておく。次に鉄の水平ブレースを設け、天井面にしっかりした水平構面を作り出した。床下には、特別に設計した金物を使って柱脚をきつくはさみ、金物の間を鉄骨梁でつなげた。これによって、鉛直方向において柱脚を拘束し、水平方向において床構面を固めた。更に、後続の免震工事には、鉄骨梁がジャッキの受けとなり、建物を丸ごと持ち上げることができた。

このように仕口部を固め、水平構面を設け、上下固められた柱らが協力し合い、一斉に折れなければ建物が倒壊する可能性が小さい。常識的にも数字的にも答えが得られた。その上免震化するので、高い安全性を確保することができた。

多くの考えとアイデアを盛り込んだこのプロジェクトは順調に進み、多くの見学者も迎え、よい評価をいただいた。着工と完成の際に、仏教式の安全祈願と竣工式が行われ、三人のお坊さんが太い声で念仏し、それぞれブレイクをずらしているか、重厚な響きが本堂中に一瞬も切らずに回り続けた。神様を身近に感じた瞬間だった。

この原稿の依頼を受け、私は池上線に乗り、「池上線」の歌を聞きながら、再びあの街、あの建物を訪れた。

今でも電車を降りてから、駅内の踏切で線路を横断しないと出られない池上駅は、両側に大きな鉄骨柱が立たれ、上に建物に覆い被さられている。大きな駅ビルが建設中なのだ。駅前も広々のロータリーが整備され、ここは近々さらなる現代的、便利な街に変わろうとしている。

しかし、本門寺の参道両側には、相変わらず歴史風韻が溢れる店が並び、赤い和傘とベンチが導く街が文化的情緒に包まれ、名物久寿餅の藤乃屋前に観光客がにぎわっている。

参道の先にある本妙院は、あの工事前とまったく同じやさしい姿で佇んでいる。中では住職が念仏している声が響き、穏やかな焼香の煙が霞んでいる。私たちの仕事はすべて天井裏と床下に隠されてどこにも登場していない。現代技術は、伝統的な建物を、伝統を継承しつつ、現代の安全基準を満たすように、裏で支えている。

変わってゆくべきものが進み、伝承するべきものを守り、過去と未来の繋がりに今の使命がある。

